所報

島根県教育庁
隠岐教育事務所
隠岐郡の島町浦郷1014
電話2-9772

ふるさと海士から目的意識を持ち、主体的に学ぶ児童の育成

十月二十七日（金）の島根県教育研究大会（浜田大会）と、十一月一日（水）の中国・四国地区へき地教育研究大会（愛媛大会）において、福井小学校の提案発表が行われました。

研究主題は、「ふるさと海士から目的意識を持ち、主体的に学ぶ児童の育成」です。内容は、

①共育コーディネーター（海士町教育委員会より学校に派遣された地域学校協働活動コーディネーター）と連携した地域資源の活用

②子供同士の相互のフィードバックが実現する教育活動の実践

③ＩＣＴの活用

というもので、六年生の総合的な学習の時間の一単元である「子ども議会」の取り組みが中心となっています。発表では、昨年度の取り組みに焦点をあて、子供同士のフィードバックの場として、東京都板橋区にある北前野小学校との遠隔交流授業について紹介されました。

これまでは、海士小学校と福井小学校との合同学習を軸に、地域の方や議員の方にサポートしていただきながら学習を進めていました。さらによりよいものにするために、教職員と共育コーディネーターが目指す子供の姿や育成を目指す資質・能力について共有しました。

共育コーディネーターのネットワークをもとに、昨年度より福井小学校では合同学習に加え、北前野小学校の六年生とのオンライン交流も定期的に行いながら学習を進めることにしました。七回にわたる交流学習では、総合的な学習の時間の取り組みを互いに紹介し、それに対して良い点や改善点などを伝え合いました。

福井小学校の児童の取り組みに対し、非常に前向きな意見やアイディアのフィードバックがありました。取り組みが賞賛されたり、認められたりする機会も多く、児童の自己肯定感の高まりも感じられました。

探究のサイクルの中に、異なる生活圏に住む小学生の視点を取り入れたことは、子供たちの主体的な学びに良い影響をもたらしました。

さらに、児童一人ひとりの学びの記録、提案原稿や発表資料の作成などは、すべて一人一台端末を活用して進められました。記録の蓄積にクラウド環境を利用することで、教師は個々の学びの様子をリアルタイムに把握でき、きめ細やかな支援が可能となりました。また、タブレット端末での原稿作成は、書くことに苦手意識を持っている児童にとっても大きな支えとなりました。このように、ＩＣＴを活用した学習スタイルは、個別最適な学びの充実につながっています。

へき地教育の特性として、少人数であるがゆえにコミュニケーションの相手が限定されることや、集団での活動の機会が少ないということがあります。今回の福井小学校の試みは、共育コーディネーターとの連携と、ＧＩＧＡスクール構想の実現があったことで可能となりました。ＩＣＴを活用した、地域との連携にとどまらない遠隔交流授業の取り組みは、各学校にとっても、参考になるものではないかと思います。

（派遣指導主事　永原）

大阪教育大学コラボレーション演習

隠岐島前地域（海士町・西ノ島町・知夫村）では、『大人の島留学』等を実施しています。これは「就労型お試し移住制度」で、対象となるのは二〇歳から三五歳までの若者です。それぞれがもっているスキルや経験を活かし、各町村で暮らす方々と協働しながら島の仕事や島の暮らしに挑戦し、魅力ある町・村づくりに貢献しています。

（詳細は https://otona-shimaryugaku.jp/）

さらに海士町では、還流（人の流れづくり）を起点とした魅力的な地域づくりの一環として、コロナ禍の影響で中断していた大阪教育大学の学生の受け入れを、昨年度から再開しました。

大阪教育大学の教育協働学科では三回生以上を対象として「教育コラボレーション演習」を実施しています。これは、三十時間の社会貢献活動の実践を通して、「教育協働人材」としての自己のキャリア形成を図ることをねらいとしています。

今年度はこれまでの体験活動を見直し、よりよい活動にするために学びのプロセスを検討した上で、九月に四名の学生を受け入れました。

はじめに事業のテーマ『教育協働人材とは』を設定し、目的意識をもって活動ができるように研修会を行い、それぞれ体験活動を実施しました。

体験活動の中での学生と地域の方の会話から「町に出ると誰もが当たり前にあいさつをしてくれて驚きました」という声や、ミカン畑での作業では、「収穫するときはうち（家）に泊めてやっけんまた来いな！」と言われ、「えっ！いいんですか。ぜひ来ます！」という言葉がけがありました。島では当たり前になっている言葉が、島外の人にとっては新鮮な言葉だと気づかされました。

また、毎日の振り返りには、海士町役場「郷づくり課」の豊田さん（前隠岐の國学習センター長）を講師として招き、テーマに沿った研修も行いました。

四泊五日という短い期間ですが、町内の様々な事業所や小学校での体験を通して、学校と地域をつなぐ「教育協働人材」について考えを深める活動になりました。また、最後には海士町での活動を通して学んだことを発表する場を設けることにより、町の関係者とともにこの活動のよさや今後の可能性を共有しました。

このコラボレーション演習は、学生のキャリア形成だけでなく、海士町の魅力発信、島民による町の魅力再発見、大人同士がつながるきっかけづくり、地域人材の発掘など貴重な機会となっています。

そろそろミカンも黄色く色づき、収穫の時期となりました。九月にミカン畑で作業体験してくれた学生たちが再び来島してくれることを密かに楽しみにしているところです。

（派遣社会教育主事　池田）